

# 広東語の文末助詞連鎖の形態論的分析

飯田 真紀\*

## 1. はじめに

よく言われるように、広東語は中国語方言の中では話し手の発話伝達の態度を表す文末助詞という品詞がとりわけ発達しており、広東語文法的一大特色をなしている。まず、最も目を引くのが数の多さである。Kwok1984:8では30個もの基本的文末助詞が挙げられている。もう1つ広東語の文末助詞に特徴的なのは、しばしば2つないし3つの形態素が連なって連鎖を形成することである。こうした連鎖の形成の仕方には一定の規則があり、広東語の文末助詞には非常に緊密な体系性が見られる。先行研究でも連鎖の成り立ちについての様々な分析が提案されてきたが、2節で見るように、いずれも共時的に見られる言語事実を満足に説明するには至っていない。

そこで、本稿は広東語の文末助詞連鎖について形態論的な観点を取り入れた新たな解釈を提示することを目指す。

なお、以下の議論では文末助詞をめぐる形態音韻論の現象がしばしば取り上げられるため、音韻論、特に音節構造や声調に関して言及が多くなる。そこで、以下に広東語の音節構造と声調の概略を、香港語言學會粵語拼音字表編寫小組2002の記述を参照し説明する。なお、本稿の広東語ローマ字表記は同書による“粵語拼音方案”を採用する。

広東語の音節の内部構造は、他の中国語方言同様、伝統的に声母と呼ばれる頭子音 (initial/onset) と残りの部分すなわち韻母 (final) とに分

---

\* いいだ・まき 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

けて考えるのが通例である。このうち、韻母についてはさらに韻腹 (nucleus) と韻尾 (coda) とに分けられる。韻尾に現れることができるのは母音だけでなく鼻音子音 -m、-n、-ng と閉鎖音子音 -p、-t、-k がある。そして声母 + 韻母の組み合わせの上に声調 (tone) がかぶさる。声調には以下の6種類が区別される。

表 1. 広東語の声調

第1声	[55]	高平ら	(high level)	第2声	[25]	高上り	(high rising)
第3声	[33]	中平ら	(mid level)	第4声	[21]	低下がり	(low falling)
第5声	[23]	低上り	(low rising)	第6声	[22]	低平ら	(low level)

2節では広東語の文末助詞連鎖の成り立ちについての先行研究における主なアプローチの概要と問題点について論じるが、その前に必要なこととして、本稿で論じる文末助詞の範囲を限定しておく。本稿で扱うのは文末助詞の中心的形式である。これらは語彙的由来が不明な形式で、生起位置が固定されている。

これに対し、先行研究 (例: Kwok 1984, Matthews and Yip 1994) でしばしば文末助詞の中に入れて記述される“添” (tim1) や“先” (sin1) は本稿では周辺の形式と見なして考察対象としない。これらはそれぞれ動詞「追加する」、副詞「先に」という現代広東語にも存在する内容語が由来となっており、文末助詞としての意味にも元の語彙の意味が大なり小なり反映されている点で中心的形式と異なる。そして何より、これらは用法の違いに応じて、以下のように異なる位置に生起する。

例えば“添”について、張洪年 1972:194 は、本稿で言う中心的形式の1つである“嘅”の前後どちらにも生起し、その場合互いに意味が違くと述べ、以下の例を挙げている。

(1) 佢請 你 食 飯 嘅<sub>添</sub> [kə33 t'im53]。<sup>1)</sup> (張洪年 1972:194)

彼 招く あなた 食べる ご飯<sup>2)</sup>

〔彼は（しかも）あなたにご飯をおごってくれさえる。〕

(2) 佢請 你 食 飯 <sub>添</sub>嘅 [t'im53 ka33]。 (張洪年 1972:194)

彼 招く あなた 食べる ご飯

〔彼は（しかも）あなたにご飯をおごってくれさえるんだよ。〕

次に“先”について言えば、「先に、とりあえず」という元来の語彙的意味を強く残す意味を表す用法では“㗎”（例 (1) (2) の“嘅”の異形態）よりも前に生起する。

(3) 佢 硬係 會 坐 吓 <sub>先</sub>㗎 [sin53 ka33]。(張洪年 1972:192)

彼 どうしても [可能性] 座る ちょっと

〔彼はどうしたってまずちょっと座ろうとするんだ。〕

一方、“先”には専ら疑問文の末尾に生起し、聞き手に「まずもって」質問に回答するよう促すような用法があり、その場合“先”は“㗎”よりも後に生起する。

---

1) [ ] 内は張洪年 1972:194 の音声表記を改変したものであるが、同書では“嘅”は非終止位置の際には曖昧母音を伴うものとして表記されている。なお、この例 (1) 及び例 (2) の“添”、そして例 (3) (4) の“先”の声調が [53] という、表1「広東語の声調」の中にない調型になっているのはこれらの周辺の文末助詞が本来は第1声 [55] でありながらしばしば下降イントネーションを伴うからである。

2) 例文のグロスで用いられる略称は以下の通りである。CL= 類別詞 (classifier)、SP= 文末助詞 (sentence-final particle)、intj.= 間投詞 (interjection)。

- (4) 《饑饉 30》？ 洗 唔 洗 捐 錢 嚟 [ㄩ] [kə33 sin53] ?  
 [名前] 必要だ [否定] 必要だ 寄付する お金 (八王子 02:119)  
 [「飢饉 30」？ まずそもそも (それは) お金を寄付する必要があるのか？]

このように、“添”や“先”は連鎖の中で複数の異なる位置に来ることがあるが、これは文法化ないしは機能拡張の度合いの違いを反映したものだと思えることができる。つまり、これらの形式は例 (4) の“先”のように文法化が進んだものほど文末助詞の中心的形式が織りなす連鎖のパラダイムを侵食する振る舞いを見せ、中心的形式の1つである“嘸”よりも後に生起することが可能になっているのだと見られる。

このような事情から、本稿では生起位置が複数あり得る周辺の形式は文末助詞連鎖の構成要素としては含めず、専ら生起位置の固定した中心的形式を対象に議論する。<sup>3)</sup>

## 2. 先行研究の検討

### 2.1. 2種類のアプローチ

広東語の文末助詞連鎖に見られる体系性についてはこれまで実に様々な分析が提示されてきており、一致した見解というのではない。しかし、連鎖の構成要素をどのような単位と考えるかという角度から見ると、先行研究は以下の2つのアプローチに分けられる。すなわち、[1] 単用可能な独立語形式が組み合わさり連鎖が形成されると考えるアプローチ、[2] 声母、韻母、声調などの音節以下の音韻的単位が組み合わさり連鎖が形成されると考えるアプローチである。

---

3) 梁仲森 1992 や飯田 2005 では“嚟” (lai4) や“住” (zyu6) も含めて連鎖の分析を行っているが、これらもまた周辺の形式であり、連鎖の構成要素からは除外して考える。

以下、具体的にどのようなアプローチか略述する。

### 2.1.1. 独立語アプローチ

まず、単用可能な独立語形式が組み合わさって連鎖が形成されると見る立場の要点を見て行く。以下、この立場を「独立語アプローチ」と呼ぶことにする。

このアプローチは主要な先行研究のほとんどで見られるもので、例えば、Kwok1984、梁仲森 1992、Matthews and Yip 1994、李新魁等 1995、方小燕 2003、鄧思穎 2015 などがある。

この立場からすれば、以下の例（5）～（7）で挙げた連鎖は単用可能な文末助詞 *ge3*、*laa3*、*wo3* が様々に組み合わさったものと見なされる。（文末助詞は漢字で書き分けるのが困難なため、これ以降、文末助詞は全てローマ字表記を行う。）

- (5) 葉小姐 返 咗 屋企 *laa3wo3*。 (Matthews and Yip1994:344)  
 葉さん 帰る [完了] 家  
 [葉さんはもう帰宅したよ。]
- (6) 你 一月 去 東岸, 好 凍 *ge3wo3*。  
 あなた 一月 行く 東海岸 すごく 寒い  
 [1月に東海岸に行くとき寒いよ。] (Matthews and Yip1994:344)
- (7) 食 得 *ge3laa3*。  
 食べる [可能]  
 [もう食べられるよ。] (Matthews and Yip1994:344)

これらはいずれも2つの文末助詞からなる連鎖と見なされるのであるが、連鎖においてしばしば前方すなわち非終止位置に生起する文末助詞の韻母の母音は終止位置に生起する文末助詞の影響を受けて逆行同化を

起こす。すなわち、Matthews and Yip 2011:390 が言うところの「母音調和的」な現象である。

例えば、(5) (6) (7) の例文における文末助詞連鎖は以下のように発音することも可能である。

(8) laa3wo3 → lo3wo3

(9) ge3wo3 → go3wo3 (Matthews and Yip 2011:390)

(10) ge3laa3 → gaa3laa3

このように、実際に実現する母音が変わっても語気の強さが微妙に変わるだけで文末助詞としての意味には変更はなく、変異形と見ることができる。

また、以下の文末助詞連鎖では2番目に生起する laa3 とその次に生起する aalmaa3 が縮約を起こしている (Matthews and Yip 1994:344-345)。このように連鎖においては同化のほかに縮約 (contraction) の現象も見られる。

(11) 你 識 去 ge3laalmaa3? (< ge3 + laa3 + aalmaa3)

あなた 知る 行く

〔(目的地にちゃんと) 行けますよね?〕 (Matthews and Yip 1994:344-345)

この連鎖はさらに同化により母音が変わり、以下のようにも発音される。

(12) ge3laalmaa3 → gaa3laalmaa3

ただし、こうした同化は必ず起こるわけではなく、同じ文末助詞の連鎖であってもいくつかの自由変異があり得ると言われる。例えば、上述の例 (9) の ge3wo3 については、gaa3wo3 という変異形もある (Kwok 1984:116)。さらに言えば、ge3 の韻母は非終止位置に生起する場合は [ə] の音価を持つとも言われる (Law 1990:192)。

以上のような、単用可能な独立語形式が組み合わさって連鎖ができる

と見なすアプローチが、先行研究の中では多数を占める。

### 2.1.2. 音韻単位アプローチ

次に、文末助詞連鎖を声母、韻母、声調といった音節以下の音韻的単位が組み合わさったものと見なす立場の要点を見る。以下、この立場を「音韻単位アプローチ」と呼ぶことにする。

こちらの立場は Sybesma and Li 2007 に代表されるものである。こうしたアプローチが出てきた背景としては、文末助詞には aa3、aa4、aa1 や wo3、wo4、wo5、あるいは laa3、lo3 や laa1、lol のように、声調だけが異なったり、声母や韻母だけが異なったりなど、互いに形態が類似する形式が多いという事情がある。そこで、形態の類似するいくつかの形式を共通の意味素を持つグループにまとめて、体系をなるべく簡潔に記述しようという試みが起りやすい。その結果、声母、韻母、声調といった音節よりもさらに小さな音韻的単位を文末助詞としての意味を担う最小の単位と見なす試みが生じて来る。こうしたアプローチの萌芽は張洪年 1972 に既に見られるが、より本格的にこの路線を推し進めた最初のものが Law 1990 である。また、共通の声母を持つ一群の形式をグループ化して意味記述を行った研究が Fung 2000 であり、Sybesma and Li 2007 に至りこの路線が極限まで追求されることになったのである。

Sybesma and Li 2007 では、単用される個々の文末助詞を音節以下の音韻的単位、すなわち声母・韻腹・韻尾・声調に分解しそれらを文末助詞としての意味を持つ最小の単位（同論文のいう MMU (minimal meaningful unit)）と見なす。そうして抽出された各 MMU にカートグラフィー理論の枠組みで機能範疇をあてがう。したがって、連鎖についても MMU の組み合わせとして分析されることになる。例えば以下の連鎖は Sybesma and Li 2007 ではそれぞれ“<”の右側に挙げた4つの MMU から成るとされる。

(13) ge3 laa3 wo3 < g3—l—aa—o

g3 (= 声母 g+ 第3声) の後にはデフォルト母音の e が、aa の後にはデフォルト声調の第3声が、o の後にもデフォルト声調の第3声が挿入されて連鎖 ge3laa3wo3 ができる。デフォルト母音やデフォルト声調というのはそれ自身は意味は持たないが広東語の音韻構造に合わせて発音しやすさを高めるために必要とされるものだという。

また次の連鎖も Sybesma and Li 2007 によると“<”の右側の4つのMMU から成るとされる。

(14) ge3 ze3 mel < g3—z + m + high boundary tone

ここでも g3 や z や m の後にはデフォルト母音の e が挿入される。

## 2.2. 先行研究の分析の難点

以上で述べた2つのアプローチはどちらもそれぞれの利点があるが、同時に難点も抱えている。

### 2.2.1. 独立語アプローチ

まず、独立語アプローチから見て行く。

このアプローチは、単用される個々の文末助詞を組み合わせて連鎖が形成されると見なすもので、文末助詞の意味は語の単位で取り出されるため、非常にシンプルで直感的にも受け入れやすい。

他方で問題点もある。

1つはいくつかの特定の連鎖形式の成り立ちについて、複数の異なる解釈が生じ得る点である。

例えば zaa3 という形式については、これが1つの語なのか、2つの語からなる連鎖形式と分析すべきかいずれの解釈にも決定打がなく、先行研究でも意見が割れている。Kwok1984 は zaa3 を1つの語と見ているが、梁仲森 1992:88 は zaa3 を1語と見ず、ze1 と aa3 という2つの語の連鎖と見なしている。張洪年 1972 (2007)、Matthews and Yip 1994 (2011)



も zaa3 を連鎖形式として扱っているが、現代語にはない ze3 という形式と aa3 との連鎖と解釈している（張洪年 1972:178、Matthews and Yip 1994:340,342）。

次に、より大きな問題点として指摘できるのは、一部の連鎖形式に見られる形態音韻論的交替をうまく説明できないことである。特に問題なのが、zaa3mel（実際の発音は zaa3 の母音がしばしば弱化して zə3mel となる）という連鎖形式で、以下のような例に見られるものである。

(15) 吓？表姨媽 唔 係 淨係得 \_\_\_\_\_ 兩個女 **zaa3mel**?

intj. おばさん [否定] ~だ ただ しかない 2 CL 娘 (J and M :133)

[えっ？おばさんのところって娘2人だけなんじゃないの？]

ここに現れた zaa3mel という連鎖は、もしこれが2つの独立語からなる連鎖形式なのだとしたら、どの文末助詞とどの文末助詞の組み合わせだと見ればよいだろうか。前述したように、同化は常に逆行同化の形で起こるため、後方に位置する mel は形態交替を起こさない。したがって、主な問題は前方に位置する文末助詞が何であるかということになる。

そこで、さしあたり考えられる可能性を挙げてみると、以下のようになる。

- ① zel + mel      ② zaa3 + mel      ③ ze3 + mel

まず、①について見ていく。zel は現代広東語に存在する文末助詞として広く認定されており、これが1語であることには異存がない。zel は Matthews&Yip 1994:354 では量などを軽視する (play down) 役割を果たし 'only' や 'just' (「～だけ」) といった意味を表すとされる。以下のような例がある。

(16) 好 平 **zel**! 買 俾 我 laal. (Matthews and Yip 1994: 355)

とても安い 買う 与える 私 SP

[安いじゃない? (私に) 買ってよ]

したがって、*zaa3mel* という連鎖について、これを *zel* と *mel* という2つの文末助詞の連鎖と見なす考えは非常にシンプルでわかりやすい。

しかし、この説には大きな問題点がある。それは、前方の *zel* の声調が *mel* と組み合わせさせた時になぜ第3声に交替するのかをうまく説明できないことである。ここでは、後方の *mel* は第1声であり、この2つの文末助詞 (*zel* と *mel*) はそのまま組み合わせただけで既に「母音調和」的である。しかし、現実には母音調和のないし同化的な *\*zelmel* という連鎖は成立せず、前方の *zel* は第3声を持つ *zaa3* (実際の発音は *zə3*) に必ず交替しなければならない。つまり、表面的に見るとここでは強制的な異化 (dissimilation) が起こっているのである。しかし、上にも述べたように、文末助詞連鎖については同化 (逆行同化) が起こることは一般に認知されているが、異化、それも必ず起こらなければならないタイプの異化の存在についてはこれまで報告されるのを聞いたことがない。したがって、*zel* が *mel* と組み合わせさせた結果 *zaa3* となる交替を、この特定の連鎖の場合に限って生じる異化現象として場当たりに処理するのは、記述の一貫性が損なわれるため、ぜひとも避けなければならない。このように、①の説は、前方に生起する *zel* の声調の交替をうまく説明できないという重大な問題がある。

次に②の可能性を見る。これは *zaa3mel* という連鎖の成り立ちを、*zaa3* という文末助詞と *mel* という文末助詞の組み合わせさせたものと見なす考えである。この考えを取れば①のような声調交替の問題はそもそも生じない。ただし、この説の難点は、前述したように、*zaa3* という形式自体が1つの語ではない可能性が先行研究 (梁仲森 1992、張洪年 1972、Matthews and Yip 1994) によって指摘されていることである。より具体

的に言えば、*zaa3*には前述の*ze1*と共通する「～だけ」という意味要素の他にも、*aa3*という別の文末助詞の意味要素が含まれている可能性がぬぐえないのである。

そのことをよく示す事実が以下である。*zaa3*は、一般には平叙文に生起すると見なされているが、実はそれだけでなく疑問文末にも生起する。

- (17) 係 唔 係 得 十蚊 *zaa3*? (Fung 2000:67)  
～だ [否定] ～だ ～しかない 10ドル  
[10香港ドルしかないのですか?]

他方、同じく「～だけ」の意味を含む*ze1*の方は、平叙文には生起するが(例(16))、疑問文末には生起しない。

- (18) \*係 唔 係 得 十蚊 *ze1*?  
～だ [否定] ～だ ～しかない 10ドル  
[10香港ドルしかないのですか?]

こうした分布の仕方において*zaa3*はむしろ以下で見るように*aa3*と平行している。*aa3*は平叙文に出現するほか(例(19))、疑問文において出現する最も中立的な形式(Kwok1984:71)として知られるからである(例(20))。

- (19) 冇 嘢 講 *aa3*。 【平叙文+*aa3*】  
無いもの 話す  
[何も言うことはないよ。]
- (20) 冇 乜嘢 玩 *aa3*? 【疑問文+*aa3*】  
ある 何 遊ぶ

〔何して遊べるの?〕

このように平叙文、疑問文という2種類の文類型に跨って出現可能という特異な分布を示す事実に鑑みると、*zaa3*の構成素の中には*aa3*が含まれている可能性が非常に高い。

しかしながら、他方で、梁仲森 1992 や Matthews and Yip 1994 などの記述から見てとれるように、*aa3*は*me1*とパラダイグマティックな関係にある。すなわち、互いにシンタグマティックに組み合わせさせて*aa3me1*というような連鎖形式を構成することはできない。そうである以上、*aa3*を構成素として含んだ*zaa3*が*me1*と共起する*zaa3me1*というような連鎖もやはり同様に成立しがたいはずである。こうした点からすると、*zaa3me1*が*zaa3*と*me1*を組み合わせたものであるという②の説も受け入れがたい。

最後に*zaa3me1*の成り立ちを*ze3*という文末助詞に*me1*が後続したものと見なす③の考えを見る。これは通時的な由来を説明する上では妥当かもしれない。張洪年 2009 によると、19世紀に編まれた広東語の教科書“Cantonese Made Easy”には*ze3*という文末助詞が見られるからである。しかし、張洪年 2009、Sybesma and Li 2007 も指摘するように、現代広東語には*ze3*という文末助詞はない。そうすると、共時的な分析としては、現代語にはない*ze3*と*me1*の組み合わせが*zaa3me1*という連鎖を生み出すという考えはやはり採用できない。

このように、独立語アプローチでは、*zaa3me1*という連鎖の形態音韻論的交替現象を共時的にうまく説明することができないのである。

## 2.2.2. 音韻単位アプローチ

次に音韻単位アプローチについて検討する。

このアプローチでは、独立語アプローチにおける各文末助詞が音節以

下の音韻的単位に分解されて意味を取り出される。こうした処置は時に非常に有効に働く。特に非終止位置に生起する文末助詞について解釈する際に有効である。例えば、2.1.1. で述べたように、非終止位置の文末助詞は韻母の母音の音価の揺れ幅が大きい。そこで、これらについては、韻母母音は指定せずに常に一定不変である声母子音のみを文末助詞の意味の担い手として指定するのである。具体的に  $ge_3$  という文末助詞の形態変化を例にとると、 $ge_3$  には  $\{ge_3\ wo_3 \sim gaa_3\ wo_3 \sim go_3\ wo_3\}$  といった変異形があり得るが、多少のニュアンスの違いを除けば、 $g$  の後の母音が何であるかに関わらずこれらの3つの連鎖形式は基本的な意味は同じである。したがって、 $g$  という声母子音を主要な意味の担い手として取り出すことは妥当な処理であると言える。

他方で、このアプローチ（具体的には Sybesma and Li 2007）では、常に終止位置に現れ、形態交替しない文末助詞まで音韻的単位に分解される。例えば、(14) で挙げた連鎖形式  $ge_3\ ze_3\ me_1$  で見たように、最後尾に現れる  $me_1$  は “ $m$  [+default vowel] + high boundary tone” のように分解され、声母子音  $m$  が MMU として取り出されている。しかし、 $me_1$  は  $ge_3$  と異なり韻母母音が /aa/ や /o/ になるような変異形を持たない。つまり、 $me_1$  については母音の音色を変えた  $\{*ma_1 \sim *mo_1\}$  といった変異形はあり得ないのである。であれば、 $me_1$  から声母子音だけを取り出す意義は  $ge_3$  の場合ほど大きくない。このように、終止位置に現れる文末助詞は、形態が安定しているため、音韻的単位に分解する必要性が乏しく、その点でこのアプローチには難点がある。

第二の難点としては、意味を担う単位に分解するとしても、このようにして得られた極小の単位に対する意味分析はいきおい抽象的にならざるを得ず、直感的な語感から乖離してしまいがちになるということである。例えば Sybesma and Li 2007 では、韻腹 /o/ を共通に持つ  $wo_3$ 、 $wo_4$ 、 $wo_5$ 、 $lo_3$ 、 $lok_3$ 、 $lo_4$ 、 $lo_1$  という合計7つの文末助詞が [noteworthiness]

という意味を共通して持つとまとめられている。紙幅の都合で個々の形式の意味に立ち入ることはできないが、前半の3つは声母も共通するためともかくとして、これを後半の4つにもおしなべて当てはめて共通の1つの意味を見い出そうとするのは、抽象化・一般化が行き過ぎで、経験的な裏付けにも乏しい。

### 3. 本稿の分析

このように、どちらのアプローチも一長一短で、共時的言語事実を無理なく説明することに成功していない。そこで、本稿ではこれらのアプローチとは異なる第3の分析を提示したい。

#### 3.1. 概要

結論から言うと、本稿では独立語アプローチと音韻単位アプローチのハイブリッドのアプローチを提示する。つまり、終止位置に現れる文末助詞のみを独立語と見なし、それ以外の文末助詞、すなわち、非終止位置に現れる文末助詞には音韻的単位である声母（具体的には g-, z-, l-）のみを立てる案である。本稿では前者を独立語形式、後者を接辞形式と呼ぶことにする。

ただし、2.1.2. の音韻単位アプローチの概要説明の際に触れたが、広東語の音節構造においては、声母だけで韻母も声調もない音節というのはあり得ない。そこで、通常、接辞形式は実現する際には、広東語の一般的な音節構造に合うように、デフォルト値として中舌中央母音 [ə] と中平ら調 [33] (実質上、第3声と同じ) が伴われると考える。音韻単位アプローチの Sybesma and Li 2007 と同様の処理であるが、本稿ではデフォルト母音を中舌中央母音 [ə] と考える点で若干異なる。

次に、連鎖を構成する形態素の順序についてであるが、本稿ではまず

互いにシンタグマティックな関係にある類としてA～Cの3つの類を区別し、A類、B類、C類の順で組み合わせると考える。連鎖は最大でこの3つの類全てが生起するが、A類+B類、あるいはA類+C類といった2つの類から成る連鎖もあり得る。むろん、連鎖を構成しないどれか1つの類だけの単独使用もあり得る。いずれの場合についても終止位置に生起する形式は本稿では全て独立語形式と見なす。独立語形式には、高下りイントネーション（↘）や軟口蓋閉鎖音 [-k]（より正確には声門閉鎖音 [ʔ]（Matthews and Yip 1994:339））といった音声的修正が加わるものもある。

図示すると以下ようになる。

表 2. 文末助詞連鎖についての本稿の分析

	接辞形式	独立語形式	音声的修正
A類	{g}	{ge3}	
B類	{l}, {z}	{laa3, lo3}, {ze1}	↘ -k etc.
C類		{aa3, wo3, me1, aalmaa3, laa1, aa4} etc.	↘ -k etc.

本稿の分析に沿って、単独使用と多重使用 (= 連鎖) のパターンを以下に示す。例文は先行研究から取るが、文末助詞の表記法は本稿の上述の分析を踏まえたものである。

[A類独立語形式]

- (21) 呢 部 機 好 可靠 ge3. (Matthews and Yip 1994: 349)  
 これ CL 機械 とても 頼れる  
 [この機械は頼りにできるんだ。]

[B類独立語形式]

- (22) 好 平 ze1! 買 俾 我 laa1. (Matthews and Yip 1994: 355)  
 とても 安い 買う 与える 私 SP  
 [安いじゃない? (私に) 買ってよ]

[C 類形式]

(23) A: 你 緊張 aa4?

あなた 緊張

[緊張してるの?]

B: 係 gwaa3。

(Matthews and Yip 1994:353)

そう

[そうだと思う。]

[A 類接辞形式 g - + B 類独立語形式 laa3]

(24) 食 得 gə3laa3。

(Matthews and Yip 1994:344)

食べる [可能]

[もう食べられるよ。]

[B 類接辞形式 l- + C 類形式 wo3]

(25) 葉小姐 返 咗 屋企 la3wo3。

(Matthews and Yip 1994:344)

葉さん 帰る [完了] 家

[葉さんはもう帰宅したよ。]

[A 類接辞形式 g - + B 類接辞形式 l- + C 類形式 aa1maa3]

(26) 你 識 去 gə3lə1maa3?

(Matthews and Yip 1994:344)

あなた 知る 行く

[(目的地にちゃんと) 行けますよね??]

[A 類接辞形式 g - + B 類接辞形式 z- + C 類形式 bo3]

(27) 男仔 踢 波 同埋 女仔 踢 波 冇 乜 分別 gə3zə3bo3。

男の子 蹴る ボール と 女の子 蹴る ボール 無い 何 区別

[男の子がサッカーするのと女の子がサッカーするのと特に何も違いはないよ。]

(Matthews and Yip 1994:345)

以下では本稿の分析の細部について説明する。



### 3.2. 分類

まず、本稿の分析のうち、文末助詞の分類の部分について説明する。表2で挙げたように、本稿では、文末助詞連鎖が最大でA、B、Cという3つの類の形態素の組み合わせから成る、言い換えれば、連鎖においてはA、B、Cというシンタグマティックな関係を持つ3つの類が帰納されると考える。

これはひとえに文末助詞連鎖として実際に起こり得るパターンを帰納した結果得られたもので、純粹に経験的な言語事実に基づいたものである。実際、先行研究には本稿の見解に近い分類がいくつも見られる。

まず、代表的な研究である Kwok1984:9-11 では実際にコーパスに起こった連鎖形式を挙げているが、その記述を見ると、連鎖は最大で3つの形態素から成っている。内訳を見ると、*laa3* と *zaa3*（本稿の {l} と {z} に近い）が互いにパラダイグマティックな関係にあり、その前に *ge3*（本稿の {g} に近い）が生起し得るとされている。したがって、*tim1* を除くと Kwok1984 で示されている連鎖のパターンは以下のようにまとめられる（同書11頁）。

$ge3 + \{laa3 / zaa3\} + \{aalmaa3 / bo3 (=wo3) / gwaa3 / mel \text{ etc.}\}$  <sup>4)</sup>  
 (Kwok1984:11)

次に梁仲森 1992:77-78 の分析も本稿と近い。周縁的形式を除けば、文末助詞が占める統語的位置には4つが認められ、各位置に生起し得るものは以下のようにまとめられる。

$ge3 + \{laa3/zel\} + \{tim1/aalmaa3\} + \{aa3/laal / wo3 / mel / gwa3 \text{ etc.}\}$

ただし、3つ目の位置を占める形式は2つしかなく、そのうち1つは *tim1* という周縁的形式であり、これを除くと *aalmaa3* しか残らない。しかし、*aalmaa3* は Kwok1984 でも *wo3* や *mel* と同じ類に挙げられて

---

4) Kwok1984:12 では *bo3* は *wo3* の変異形として代わりに取り上げられている。

いることから窺われるように、wo3 や me1 などと連鎖を形成することはできない (\*aalmaa3wo3, \*aalmaa3me1)。したがって、aalmaa3 だけのために 1 類を設けるのは不経済である。そこで、aalmaa3 の属す類をその後ろの類と合併し体系をよりシンプルにさせると、やはり 3 つの類が帰納される。

他にも似た記述をする研究に方小燕 2003 がある。この研究では周辺の形式を除くと、やはり ge3 が一番先頭に生起し、中間に laa3、lo3、zaa3 (本稿の {l} と {z} に近い) などが来ると述べている (同書 93 頁)。そして最後尾にのみ出現する形式として me1 や bo3 (≡ wo3) が挙げられている。

ge3 + {laa3/ lo3/ zaa3} + {me1 / bo3 etc.}<sup>5)</sup> (方小燕 2003: 92-94)

このように、文末助詞を生起位置の違いから 3 つの類に分類する分析は珍しいものではない。特に、前方に位置する 2 つの類については類の所属メンバーの認定も含めて先行研究の間で高い一致が見られる。すなわち、最初の類は ge3 (本稿の {g}) から成り、次の類は l 系統と z 系統の 2 タイプの形態素から成ると見なす点は多くの研究が一致して認めるところである。音韻単位アプローチを取る Sybesma and Lee 2007 でも、純粋に経験的な事実としては、g- が最初に来て、z と l が次に続くということを描している。

こうしたことから、g- が最初に現れ、次に l- または z- が現れるという本稿の分析がそれほど突飛なものではないことがわかる。これらは本稿ではそれぞれ A 類、B 類と名付けられる。そして、なるべく不必要に分類を行わないのが望ましいことから、それ以外の残りを全て最後尾に現れる形式群 (C 類) と見なし、合計で 3 つの類を立てる分類を提案する。

なお、各類の範疇的意味については、先行研究などでも様々な提案が

---

5) ただし、最後尾にのみ出現する形式として ze1 や zek1 が挙げられている点は本稿と異なる。梁仲森 1992 と本稿の間にもこういった各類に属す具体的な形式の認定の違いが見られる。

あるが、本稿では詳しく論じる準備はない。そこで、ひとまず飯田 2005 を改訂し、以下のように規定しておく。

A 類： {g} < 命題一般化 >

B 類： {} < 新状況出現 > / {z} < 低いランク付け >

C 類： < 伝達態度 >

C 類には夥しい数の形式が属するが、いずれも言表内容をめぐる伝達態度の表し分けに関わるものだとまとめることができる。

### 3.3. 生起位置による独立度の違い

次に、本稿の分析を特徴づける点として、各類の文末助詞の生起位置による独立度の違いについて説明する。

本稿では、表 2 で示したように、非終止位置に現れる A 類 g-、B 類 l-/z- を声母子音のみからなる接辞的な性質を持つ形態素と見なした。この点で、音韻単位アプローチに近く、独立語アプローチとは大きく異なる。

このように非終止位置に現れる A 類と B 類を接辞形式と見なす本稿の分析の利点はいくつかある。

第 1 に、2.2.1. で述べた独立語アプローチでは説明がつかない zaa3mel（実際の発音は zə3mel）という連鎖形式の成り立ちを問題なく説明できる。本分析ではこれを接辞形式 z- と独立語形式 mel が組み合わさった連鎖、すなわち、z-+mel という連鎖と見なす。ただし、実際の発音においてはデフォルト母音とデフォルト声調が挿入されて zə3mel となるのである。

同様に、z- に C 類が後続する連鎖において、後続形式の声調の如何に関わらず z- 自身の声調がどれも第 3 声で実現するという事実もこれによりうまく説明される。<sup>6)</sup> 例えば、Kwok 1984: 68-69 の記述を見ると、z-

---

6) z- の後に aalmaa3 や aa4 のような母音で始まる C 類が続く場合は縮約が起り、それぞれ zaalmaa3 や zaa4 のようになるため、この限りではない。

に wo4 が後続する場合は zə3wo4、z- に wo5 が後続する場合も zə3 wo5 となり、ともに前方の形式は第 3 声で実現している。

第 2 の利点は、この分析を採用すると、非終止位置の A 類や B 類の母音がしばしば中舌中央母音で発音される現象が説明しやすいということである。筆者による実際の観察では、連鎖の非終止位置に立つ文末助詞については弱化した母音である中舌中央母音 [ə] が聞かれるのが常であるが、先行研究でも類似した趣旨のことが指摘される（張洪年 1972:171、Law 1990:192、Sybesma and Li 2007）。こうした言語事実に対して、A 類と B 類については g- や l-/z- のような子音の形態素だけを立てるのではなく、[ə] と中平ら調 [33] を伴った「子音 + [ə] + [33]」のような音節性の形態素を立ててもよかったのであるが、本稿ではそうしなかった。これは、子音だけを立てておいた方が、連鎖形式が時に子音連続（“複輔音”）のように発音されたりする（張洪年 1972:171）という事実をより説明しやすいからである。

第 3 の利点は、子音部分だけを取り出すことで、A 類・B 類の範疇的意味を担う形態素をその他の付加的な意味を交えないで特定することができることである。例えば、〈命題一般化〉の意味を担うのは {g}、〈新状況出現〉の意味を担うのは {l}、〈低いランク付け〉の意味の担い手は {z} といった具合である。

以上いくつかの利点は音韻単位アプローチについても同様に当てはまることであるが、本稿の分析は以下の点で音韻単位アプローチと決定的に異なる。それは、先述したように、非終止位置に現れる形式のみを接辞形式と見なし、終止位置に現れる形式については一律に独立語形式と見なす点である。このように、本稿は独立語アプローチをも部分的に採用する。

### 3.4. A 類・B 類独立語形式の伝達態度

前節最後で述べたように、終止位置に生起する形式に関して言えば、本稿は独立語アプローチを採用する。ただし、本稿では独立語形式に関して、以下のような独自の見解を持つ。それは、専ら A 類、B 類の独立語形式（例：ge3、laa3、ze1）の位置付けに関することであるが、これらを各類の範疇的意味と何らかの伝達態度という 2 つの意味を 1 つの形式のうちに融合させた cumulative expression（あるいは portmanteau morphs: Haspelmath and Sims 2010:63-64）と見なす点である。cumulative expression については、例えば、Haspelmath and Sims 2010:63-64 の例を借りれば、英語の "worse" という語に 'bad' の語彙的意味と比較級の意味が分割不可能な形で融合的に含まれているといった例が挙げられる。

このように、本稿では A 類、B 類の独立語形式（例：ge3、laa3、ze1）というのは、いずれも範疇的意味のほか何らかの伝達態度を内に含んでいると考える。例えば、laa3 については <新状況出現> のほかにある特定の伝達態度が含まれ、また ze1 には <低いランク付け> の意味のほかにある特定の伝達態度が含まれているといった具合である。本稿ではこれらの伝達態度が具体的にどういったものかを議論する余裕はないが、ze1 に何らかの固有の伝達態度が含まれていることは、zaa3 との対比を示した例 (17) (18) から窺われる。すなわち、同じ範疇的意味<低いランク付け>を持ちながら、ze1 が疑問文と相いれない一方、zaa3 が疑問文と共起可能という分布の差は、これら 2 つの形式の伝達態度の違いに由来するものと思われる。zaa3 は本稿では z- と aa3 の連鎖形式と考えるため範疇的意味を z- が担い、伝達態度を aa3 が担った分析的な形式だと考えられるが、ze1 の方は (e1 という独立語形式がないため) 連鎖形式である可能性はなく、したがってこれ以上の分割が不可能な単一の形態素である。ゆえに、ze1 には範疇的意味とともに伝達態度の意味が融合的

な形で含まれていると見なされるのである。

B 類独立語形式が範疇の意味の他に伝達態度をも含んでいるということを示すほかの言語事実としては、音節末の音声的修正の現象が指摘できる。3.2. の最後で述べたように、伝達態度というのは C 類によって専ら表される範疇の意味であったが、C 類には表 2 に挙げたように、下降調イントネーションを伴ったり、軟口蓋（声門）閉鎖音を伴ったりする形式が一部にあった。こうした音声的修正は、伝達態度の微調整を行うものであると考えられるが、こうした現象が、C 類だけでなく、B 類独立語形式にも平行して見られるのである（表 3）。

表 3. 伝達態度の微調整を行う音声的修正の例

	下降調イントネーション	軟口蓋（声門）閉鎖音
B 類	zel ~ zel ↘	zel ~ zek1 laa3 ~ laak3
C 類	laal ~ laal ↘ mel ~ mel ↘	aa3 ~ aak3 mel ~ mek1 <sup>7)</sup>

以上では B 類独立語形式における伝達態度の存在を指摘したのであるが、次に A 類独立語形式の伝達態度について論じる。

A 類独立語形式というのは実質 ge3 という文末助詞のことを指す。ge3 は元は連体修飾語句と中心語名詞とをつなぐ、いわゆる構造助詞の“嘸” (ge3) 「の」に由来するものである（例：香港大學嘸學生「香港大学の学生」）。

構造助詞の“嘸”は非常に多機能で、上述のような連体修飾語句のつなぎのほかにも様々な機能を獲得しており（張洪年 1972:185-187、Sio 2011）、以下のような文末助詞としての用法をも獲得している。

7) 周家發によるインターネット上で発表された論考による。以下を参照：

<http://chowkafat.net/Lingpassage3.html>

(28) 佢 會 嚟 ge3。

彼（女）[可能性] 来る

[彼（女）は来ます。]

それではこのような由来を持つ ge3 という A 類独立語形式が持つ伝達態度は何であるかという、「宣言」というものが暫定的に考えられる。すなわち、言表内容を宣言的に述べ立てる伝達態度である。先行研究でも ge3 の意味に対しては "assertion" との記述が目立つことからこれが窺われる（例えば Matthews and Yip 1994:349 や Sio 2011）。

このように、A 類独立語形式 ge3 には<命題一般化>という範疇的意味だけでなく「宣言」という伝達態度的意味が含まれていると見なすと、ge3 が次のように疑問文に馴染まないという振る舞いがよりよく説明される。

(29) \* 佢 會 唔 會 嚟 ge3?

彼（女）[可能性] [否定] [可能性] 来る

[彼（女）は（本当に）来るの?]

(30) \* 得 唔 得 ge3?

OK [否定] OK

[(本当に) 大丈夫なの?]

これは ge3 が持つ宣言的伝達態度と疑問文が表す「質問」の発話行為とが抵触するからと考えられる。もし、A 類の範疇的意味を表しつつ「質問」を形成したいのなら、A 類接辞形式 g- の後に、「質問」と馴染む伝達態度を表す独立語形式を後続させればよい。例えば、以下のように、g- の後に ne1 や aa3 といった C 類形式を後続させた連鎖であれば適格である。

(31) 佢 會 唔 會 嚟 gə3 nel? (<g- + nel)

彼(女) [可能性] [否定] [可能性] 来る

[彼(女)は(本当に)来るのだろうか?]

(32) 佢 會 唔 會 嚟 gaa3? (<g- + aa3)

彼(女) [可能性] [否定] [可能性] 来る

[彼(女)は(本当に)来るの?]

(33) 得 唔 得 gə3 nel? (<g- + nel)

OK [否定] OK

[(本当に)大丈夫だろうか?]

(34) 得 唔 得 gaa3? (<g- + aa3)

OK [否定] OK

[(本当に)大丈夫なの?]

このように、A類独立語形式もB類独立語形式も、いずれも範疇的意味と同時に何らかの固有の伝達態度を含んだ融合的形態素だと考えられるのである。

#### 4. まとめと示唆

最後に本稿の主張を再度まとめ、そこから導かれる若干の示唆を述べる。

3.1. で述べたように、広東語の文末助詞に関しては、A～Cの3つのシンタグマティックな関係にある類が区別される。そして、類の如何を問わず、終止位置に現れる文末助詞のみが独立語（独立語形式）であり、非終止位置に現れる文末助詞は声母子音のみから成る接辞形式と見なすのが妥当である。

この主張に沿うと、A類とB類については、非終止位置に現れる形式



はいずれも接辞形式と見なされるのであるが、これはあくまでも共時的な観点からの分析である。通時的に見ると、これらの接辞形式も元来は独立語形式に由来するはずである。例えば、A類 g- は前述のように ge3 という構造助詞に由来することが明白であり、B類についても l- は laa3 もしくは lo3 という独立語形式、z- は早期の広東語に存在したと言われる ze3（張洪年 2009）もしくは zel などといった独立語形式に由来すると見られる。ただ、繰り返すように、共時的分析としては非終止位置のそれは接辞形式と見た方が妥当だということである。

このように、本来、独立語形式であったものから接辞形式へと移り変わっているということつまり、現代広東語ではA類やB類が既にかなりの程度、文法化しているということを示唆している。また、A類の文法化度の高さは、分布の範囲が共通語（普通話）と比べてはるかに広いことから見て取れる。最も典型的なのは、A類接辞形式 g- が疑問文と共起できる点である（例（31）～（34））。

共通語にも広東語のA類接辞形式 g- と同じく構造助詞に由来する文末助詞“的”というものがあり、広東語の g- と部分的に似た意味を表すが、共通語の文末助詞“的”はそれほど分布範囲は広くなく、疑問文とは共起しない。例えば、広東語の（31）（32）を直訳して次のように言うことはできない。

(35) \* 他會不會來 { 的呢 / 的呀 } ? [彼は（本当に）来る | んだらうか / の | ?]

また、広東語のA類接辞形式は様々な文末助詞と組み合わせることが可能で、これが多彩な文末助詞連鎖パターンを生み出す原因の1つとなっている（例（24）（26）（27）参照）。こうしたことから文法化度合いの高さが窺われる。

本稿の根幹をなすもう1つの主張は、これもA類とB類についてのこ

とであるが、終止位置に現れる形式、すなわち独立語形式に関しては、各類の範疇的意味と伝達態度的意味とを融合的に含むという点である。

特にこのうち A 類独立語形式 ge3 については、「宣言」の伝達態度が発達してきたメカニズムを本稿では以下のように考える。先述の通り、ge3 は構造助詞“嘅”に由来するが、文末助詞として用いられ始めた当初は共通語の“的”のようにそれほど連鎖構成能力が高くなかったと推測される。しかし、その後、次第に分布範囲が広がり、様々な伝達態度を表す C 類形式と組み合わせり連鎖パターンが増えるにつれ、g- という声母子音を共有する一群の形式が織りなすパラダイムが発達してくる。そこで例えば gaa3 (< g- + aa3)、gaa4 (< g- + aa4) など、範疇的意味と伝達態度とを分析的に表す諸々の連鎖形式との対立関係の中に置かれることで ge3 もその意味が再分析され、その結果、範疇的意味と伝達態度の両方を融合的に表す形式として捉え直されていったのではないかと考えられるのである。

本稿の分析は現代広東語の文末助詞連鎖についての共時的言語事実を、これまでに出された過去のどの見解よりもうまく説明することができるのではないかと思われるが、もしこの説が妥当であれば、さらにもう 1 つ示唆的なことがある。それは、広東語の文末助詞の中には、音節よりも小さな音韻的単位の接辞形態素が存在するということである。こうした点で、文末助詞は広東語の他の品詞にはない特殊な性質を持つと言える。

## 例文出典

J and M: 《John & Mary》鄧藹霖 1988 香港：博益出版集團有限公司。

八王子 02: 《八王子 廣播劇小説 <下集>》少爺占 2005 香港：商台製作有限公司。

※出典を記していないものは筆者の作例で母語話者の確認を経たものである。

## 参考文献

- 飯田真紀 2005 「広東語の文末助詞」東京大学大学院人文社会系研究科博士論文。
- 鄧思穎 2015 《粵語語法講義》，香港：商務印書館。
- 方小燕 2003 《广州方言句末语气助词》，广州：暨南大学出版社。
- 李新魁 黄家教 施其生 麦耘 陈定方 1995 《广州方言研究》广州：广东人民出版社。
- 梁仲森 1992 《香港粵語語助詞的研究》，M.Phil.thesis, Hong Kong University of Polytechnic.
- 香港語言學學會粵語拼音字表編寫小組 2002 《粵語拼音字表（第二版）》香港語言學學會。
- 張洪年 1972 《香港粵語語法的研究》，香港中文大學出版（增訂版 2007）。
- 2009 《Cantonese Made Easy: 早期粵語中的語氣助詞》，《中國語言學集刊》第 2 卷第 2 期。
- Fung, Roxana Suk Yee 2000 *Final Particles in Standard Cantonese: Semantic Extension and Pragmatic Inference*. Ph.D Dissertation, Department of East Asian Languages and Literatures, The Ohio State University.
- Haspelmath, Martin, and Andrea D. Sims 2010 *Understanding Morphology. 2nd edition*. London: Hodder Education.
- Kwok, Helen 1984 *Sentence Particles in Cantonese*. Hong Kong: Centre of Asian Studies, University of Hong Kong.
- Law, Sam-Po 1990 *The Syntax and Phonology of Cantonese Sentence-final Particles*. Doctoral dissertation, Boston University.
- Matthews, Stephen, and Virginia Yip 1994 *Cantonese: A Comprehensive Grammar*. London: Routledge. (2nd edition 2011)
- Sio, Joanna Ut-Seong 2011 The Cantonese ge3. In *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, Foong Ha Yap, Karen Grunow-Hårsta and Janick Wrona (eds). Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 125-146.
- Sybesma, Rint, and Boya Li 2007 The dissection and structural mapping of Cantonese sentence final particles. *Lingua* 117: 1739-1783.

【追記】 鳥津幸子さんとは大学院時代から授業や研究会で何度もご一緒してきましたが、穏やかで控えめな口調のご発言には、鋭い指摘が交えられて

いて、色々と気づかされることが多く、感謝しています。今後も緻密で秀逸な論文をいくつもお書きになると思っていましたし、またお互い切磋琢磨して研究に精進していけると思っていましたので、返す返すも残念でなりません。